

# 日本への俳句・俳画の旅

## イオン・コッドレスク (ルーマニア)

詩人はみな心に大切な場所をいくつか抱いています。それは第一に自分が生まれた場所であり、歳月によっても消すことのできない場所、素晴らしい風景でいっぱいのこの世界のあちこちへ何度旅をしても忘れることのできない場所です。第二に私が学生として学んだ場所、私を詩の世界に導き、私の人格を形作り、詩人としての個性を育ててくれた教師や師と出会った場所です。第三に、見たものすべてに、出会った人すべてに引きつけられた場所、母国から一万キロも離れた国にありながら、家にいるような安らぎを感じさせてくれる場所です。

私にとって、この三つのうち最初の場所は生まれた村、黒海沿岸から40 kmに位置するヴァイソアラです。両親や兄弟姉妹と過した家と6キロ平米の庭があり、その庭で私はかくれんぼをしたり、本を読んだり、鳥や動物の世話をして過ごしました。村は森とゆるやかな丘に囲まれていました。心に残る第二の場所は、ルーマニアの首都ブカレストです。詩人・画家となるために学んだ場所であり、教師たちや、足繫く通った図書館、美術館、アートギャラリー、書店、劇場などから、詩人・画家としての精神と生き方に必要なものを学びました。心に残る第三の場所は日本で、コンスタンツァの美術高校の生徒だった16歳の頃からずっと行きたいと思っていました。高校の図書室ではじめて日本画の画集を見た時、あまりに西洋絵画と違うことに衝撃を受けました。日本へ行くという夢は、23年後に、母国が共産主義を棄て、ニコラエ・チャウシェスク書記長から自由になった後に叶いました。

1990年の夏、私は初めて日本に来ました。すでに39歳になり、独学で俳句と墨絵を学び始めてからおよそ20年が経っていました。この1990年の初めにはすでに毎日デイリーニュースが私の俳句を英語と日本語で取り上げていました。

*lime blossoms are dripping*

*one by one—*

*a thought rages me*

滴り落ちるライムの花

ひとつまたひとつ

心に浮かぶ思い出

この俳句の発表のあと、秋山光男一家が一月間の奨学金を与えてくれ、私は美術館を見学し、東京、横浜、熱海、日光、鎌倉、京都を旅行しました。多くの芸術家、詩人、大学教授と出会い、日本の美術や詩や文明などを理解する手助けをしてもらいました。すでに日本

は私の精神的な母国になりました、私の本の主題は日本の題材、俳句、短歌、連句、俳文や俳画に関するものだったからです。私の墨絵の画風は、日本画一般、特に俳画から大きな影響を受けました。日本と西洋の俳画を数年間研究した後で、2007年に「俳画のイメージとテキスト」という論文でブカレスト芸術大学の視覚芸術博士号を取得しました。

1990年以降、数年以上も心の母国である日本と友人に会えないでいることが寂しくなりました。そこで荷造りをし、日本への長い旅に出発しました。1991年、1998年、2000年、2016年、そして2023年のことです。2016年には友人の詩人（伊藤勲教授）と、およそ3世紀前に私たちの俳句の師、松尾芭蕉が横断した奥の細道を歩きました。別の旅では、展覧会を開き、俳句、連句、短歌、俳文、俳画の西洋人作家としての私の経験について講演をしました。毎回、東京国立博物館に雪舟等楊の「冬景山水図」や長谷川等伯の「松林図（屏風）」を見に行くのが楽しみでした。京都では、古都の路地を歩くことや、竜安寺の枯山水の静寂の中で過ごすのが好きです。行ってみたい場所はたくさんありますが、旅行の日程は限られているので選ばざるを得ません。日本に帰ってくる度に、できる限り古い友人と会ったり新しい友人を作ったりしています。

1998年に東京の国士舘大学での連句シンポジウム（私の連句の師である福田眞久教授（俳号：真空）が開催）と、佐渡島での詩のフェスティバルで出会った友人のひとりが、私が敬愛する俳人の佐怒賀正美さんです。彼は偉大な手腕と献身と正確さで一いけば時計屋か、時間通りになる日本の列車のような正確さで—2023年4月10日から23日までの東京滞在の間中、講演会や展覧会や見学や会合などを計画してくれました。今年、私たちの友情が25年目を迎えたことを俳句に感謝したいと思います。なぜなら俳句が私たちを友人にしてくれたから、そして人生の残りの日々も友人で居続けるだろうと思えるからです。

佐怒賀正美さんが私のために準備してくれた5つの講演会を含むプログラムは以下のとおりです。

1. 講演『芭蕉とブリューゲル～自然への2つのアプローチ』、4月14日午後2時～4時、江東区芭蕉記念館。芭蕉記念館と国際俳句協会、現代俳句協会の共催。
2. 講演『芭蕉とブリューゲル～自然への2つのアプローチ』、4月16日午後2時～4時、「ゆいの森あらかわ」、荒川区荒川2-50-1、現代俳句協会主催。
3. 講演『ペインティング・イン・ポエトリー（Painting in Poetry）～世界各地の100人の俳句から着想を得た俳画100作品』、4月17日午後1時～5時、「北とびあ」北区王子1-11-1、「秋」俳句会主催。

4. 講演『ペインティング・イン・ポエトリー (Painting in Poetry) ～世界各地の100人の俳句から着想を得た俳画100作品』、4月18日午後4時～5時30分、東京外国語大学、菅長理恵教授主催。

5. 白山市「千代女の里俳句館」と金沢市「兼六園」への旅行、4月20日終日。

6. 講演『ペインティング・イン・ポエトリー (Painting in Poetry) ～世界各地の100人の俳句から着想を得た俳画100作品』、4月21日午後4時35分～6時5分、専修大学、千代田区神田神保町3-8、佐怒賀正美講師の俳句講座。

以上の多くの講演会の中でも、最も感動的だったのは芭蕉記念館での講演でした。私が最も敬愛する俳人、芭蕉を顕彰する場所で行われたからです。俳句を愛する聴衆と日本の俳句作家たちの前で、この有名な記念館のホールで公演をする日が来るとは、夢にも思っておりませんでした。何もかも細部に至るまで見事に準備されていました。私たちは演題に『芭蕉とブリューゲル～自然への2つのアプローチ』を選び、世界と自然、そして人間とそれを取り巻くものとの関係性に対する二つの観点を紹介しました。すなわち詩人芭蕉の観点(ヴィジョン)と画家ブリューゲルの観点です。芭蕉はヨーロッパから遠く、ブリューゲルよりも百年あとの日本文化の精神風土で教育を受け創作をしました。それでも、彼らが生きた場所と時代の隔たりにもかかわらず、日本の俳人芭蕉とフランドル派の画家ブリューゲルの間には創作者、詩人、画家たるにふさわしい多くの共通点がありました。私は芭蕉記念館の関係者からブリューゲルは日本で最も有名な西洋画家のひとりであると聞き、嬉しくなりました。

講演の終わりには、私は聴衆がこの演題に集中し、好感と豊富な知識を示したことに感動しました。私は質問攻めにあい、すべての質問に答える時間はありませんでした。大変幸運なことに、会場には30年以上も日本に住んでいるルーマニア人のフロリン・デリアヌ教授がおられ、質問を日本語からルーマニア語に、回答をルーマニア語から日本語に訳してくださいだったので、会場の聴衆と私との会話には何の齟齬もありませんでした。講演が終わり、ホテルに向かうタクシーがすでに到着していましたが、私はまだ聴衆から質問を受けていました。会場は満員で、主催者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

日本への旅行中に、東京で開催された他の講演会や会合についても大変感謝しておりますが、紙面に限りがあるため割愛させていただきます。しかしながら、千代女の里俳句館訪問についてちょっと書き加えたいと思います。松尾芭蕉の門人である千代女の俳句に着想を得て、私が創作した17点の俳画の原画を俳句館に寄贈しました。この17作品は「アーティスト・ブック」として創作した作品集に含まれています。この作品集に加えて、デラッ

クス版として手刷りで複製された17点の俳画を入れた美術書『オン・ザ・ウェイ (On the Way)』も贈呈しました。松尾芭蕉のように現代日本の俳人たちの多くが旅を好み、美しい日本の聖地や寺院を訪ねるのを私は知っています。ですから、もしあなたが金沢に行ったら、迷わず千代女の里俳句館を訪ねてください。列車でわずか数十分の距離ですから。千代女の里俳句館に入ったら、この本と千代尼の俳句から着想を得た17枚の俳画のあるコーナーを訪ねてください。

最後に、近作より。

*opening the book  
a dry petal reminds me of  
its fragrance*

本開く  
乾いた花の  
香り立て

*day break—  
a touch of light  
on the paper cranes*  
夜が明けて—  
光が触れる  
折鶴に

*touching the tree  
an ant crosses my hand—  
May evening*

木から手へ  
蟻渡り来る  
五月の夕

*you, dandelion seed  
stay too long  
in the dewdrop*

タンポポの種よ  
もっととどまれ  
露の雫に

*noisy sparrows*

*under the eaves—  
far away the silent Fuji*  
軒下に  
騒がしい雀たち  
静かな富士を遠く離れて

*reading letters  
two butterflies come  
and return in my garden*  
手紙読む  
蝶二頭行きつ戻りつ  
わが庭に

*Ryoan-ji garden—  
I sketch its stones  
amid cicadas' song*  
竜安寺の庭  
石を描けば  
蟬の声

*at the opera  
a moth is flying  
in the spotlight*  
オペラに  
蛾が飛んでいる  
スポットライト浴び

*surprised by rain  
the dragonfly and I  
separate*  
雨におどろき  
蜻蛉とわたしは  
別れ行く

(翻訳：杉 美春)

